

ワークショップ「翻訳合」に向けて —— 学生が詩歌を訳す ——

高井 詩 穂

「翻訳合」には、Survey of Japanese Literature 1 の受講生が参加することになった。この授業は日本古典文学を英語で学ぶ JCulP（国際日本文化論プログラム）一年生の必修授業で、一般の文学部・文化構想学部生にも履修できるようになっている。今年の履修生は四十名余りで、交換留学生の受講生も加わり、日本学生（JS）と海外学生（OS）が約半数ずつという構成で行われた。『万葉集』や『古今和歌集』をはじめ、『源氏物語』や『徒然草』、『平家物語』など、授業で取り扱う作品にはどれも和歌が深くかかわっており、また、それらを英語で学ぶことによって、翻訳の役割や意義についてのディスカッションも繰り返し行われてきた。

11月15日に行われたイベントはクォーター末に当たり、授業を締めくくるとても有意義な機会となった。事前にウォーラー先生から和歌を二首、ハウエン先生から短歌を二首、それぞれ翻訳対象として選んでいただき、難しい単語の注釈や翻訳のポイントなどを書いた資料もいただいた。それを授業で配布し、イベントに先立って全員に翻訳を用意してもらい、11月5日の授業で和歌と翻訳に関する学生プレゼンテーションとディスカッションを行った。翻訳の対象となったのは以下の四首である。

宇治前太政大臣布引の滝見にまかりたりける

共にまかりてよめる

白雲とよそに見つればあしひきの山もとどろに落つる激つ瀬

大納言経信 『金葉和歌集』巻九・雑上 545

五十首歌たてまつりし時

五月闇みじかきよはのうたゝねにはなたち花の袖にすゞしき

前大僧正慈円 『新古今和歌集』巻三・夏歌 242

我が庭に咲くくれなるの菊の花折りて来にけり絵を写すべく

正岡子規（1867-1902）

サン・セバスチャン絵の中にひたすらに水欲り水の上ゆく椿

塚本邦雄（1920-2005）

ウォーラー先生からは、和歌の掛詞、枕詞、本歌取などを訳にどう生かすかや、「とどろ」という音の響き、「五月闇」「花橘」といった言葉の裏にある文化的意味をどのように訳すか、というような、翻訳をする上で注意すべき点が示された。ハウエン先生からも、作者や作品の簡単な説明に加え、短歌の五七五七七の歌体と、その歌体から外れた実験的な塚本邦雄の短歌をどう訳すのかや、一つの場面を写實的に描いた子規の短歌をどう訳すのか、対照的に一つの短歌に二つの場面を描く塚本の短歌をどう解釈するのかなど、翻訳の際の課題が示された。

日本語の理解度や英語力は学生によって異なる上、日本人の学生であっても和歌や短歌の解釈は難しい。そこで、事前に単語レベルの意味や背景に関する多少の解説を与えた上で、学生にはペアで一つの翻訳を作ってもらふことにした。当初はJSとOSにペアを組んでもらう予定だったが、学生が翻訳したい和歌・短歌を選んだ際にJSとOSが均等に分かれなかったため、JSのみ、あるいはOSのみのペアも出てきた。バイリンガ

ルの学生の中には、一人で訳すことを選んだ学生もいた。

授業内のプレゼンテーションでは、八名の学生が自分の翻訳とそのポイントや苦労した点などを披露し、その後クラス全体が各自の選んだ和歌と短歌に分かれてそれぞれの訳について話し合った。ほとんどの学生が和歌や短歌の翻訳は初めてであったが、示された翻訳の課題などに注意しながら、創意工夫を凝らした訳を用意していた。例えば、課題として示された「花橘」の訳については活発なディスカッションが行われ、「orange blossom」や「citrus flower」のような具体的な花の名前へ英訳してなるべく英語の作品として自然に仕上げるアプローチや、「tachibana」という日本語の音をあえて残すことで読者に日本の花であるということを意識させて文化的背景を示唆するアプローチの両方が見られた。また変わったところでは、「花橘」を具体的な花の名前として訳さず、「familiar flower」と曖昧に訳した作品もあった。これは、慈円の和歌の本歌（五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする）の「花橘」と「昔の人（昔親しかった人、恋人）」との連想を生かすため、様々な文化背景を持つ読者一人ひとりが親しみのある花を想起できるように選んだものである。

和歌や短歌の型に関しても、七五調をなるべく忠実に訳したものから、あえて長めの詩として訳すことによって描かれた世界を豊かに表現した翻訳まであり、学生の自由な発想にあらためて驚かされた。塚本邦雄の実験的な作品に関しては、アルファベットの大文字小文字を実験的に並べて訳したり、詩歌ではなく文章のように淡々と訳したりするなど、様々な工夫がなされた。

ディスカッションをする中で、互いの訳し方を見ながら、JSは日本語の解釈や文化背景について、OSは英語のニュアンスや英訳が想起させるイメージについてなど、互いにアドバイスをしあう様子が見られた。その中で自分の訳を大幅に変更する学生も多かった。また、元々はペアで訳した学生には二人で一つの訳を用意してもらった予定だったが、個々の細かい解釈や表現法に違いがあることも多く、最終的にそれぞれが少し異なる訳を用意するペアも多く見られた。これは、各学生が積極的に翻訳する詩歌と向き合い、細かいところまで注意を払って最高の訳を作ろうとした姿勢の現れである。また、翻訳が単純な言語の置き換え作業ではなく、非常に繊細な創作活動であることの現れでも感じるように感じた。

最終的に、「翻訳合」にはなるべく違うタイプの作品を選び、一名と三ペアの学生（JS二名、OS四名、留学生一名）に発表してもらったが、選ばなかった作品にも優れたものは多かった。また、この英訳の経験によって、「翻訳の力」のイベントのマッコリー、バイチマン両氏の講演で語られた翻訳における苦労話などに共感できた、という声も聞かれた。

「翻訳合」の準備として学生全員に詩歌の英訳に関わってもらったことは、古典文学の理解という点からも大変意義深かった。鑑賞するだけでは遠く感じてしまうような古語や文語で書かれた一見難しい作品も、翻訳活動の中で、血の通った人間の作った作品として生き生きとよみがえってくる。Survey of Japanese Literatureの授業でも、例年は和歌を「難しい」と敬遠する学生が多かったが、今年は英訳を通じて詩歌に親しみを感じ、和歌に込められた意味や作者の気持ち、作品の背景などを、学生がより深く主体的に考えて解釈・理解をする姿勢が見られた。また、その解釈を英訳にする際にも、各々が創造力を発揮して感性豊かな翻訳を作り上げたように感じた。今後も引き続き、英語で行う日本文学の授業に翻訳ワークショップを取り入れていきたいと思う。